
慈幻闘衣KAITO ~ モンスターハンター列伝 ~

陸斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慈幻闘衣KAITO〜モンスターハンター列伝〜

【Nコード】

N2423I

【作者名】

陸斗

【あらすじ】

主人公カイトは、大陸全土に名を轟かす凄腕ハンター、ランディを父に持つ。とある「事件」がきっかけで、ランディは辺境の村ココットを活動の拠点にするため、まだ幼いカイトとともに村に居を構える事にした。ランディはカイトを一人前にするため、毎晩修行をつける。

カイトは、自分をハンターにしようとしている父の想いに応えたい

気持ち

はあるが、元来の争いを好まない性格が己の道を塞いでいた。

ある晩、いつものように修行を終えたカイトは、金髪の少女マリアと運命的な出会いをする。

この出会いがカイトの人生を大きく変える事になる。

腕っ節は並のハンター顔負け、しかし純粹で優しい心を持つカイトが様々な苦難を乗り越え、やがて世界規模の争乱へと巻き込まれる。

プロローグ

ある人は幸せを願ひ

ある人は救いを求め

またある人は平和を祈りました

しかし、神が人に与えるものはいつも試練でした

だからこそ私達は生き続けるのかもしれない

いつか辿り着くであろう闇の向こう

そこに待つであろう安らぎの光を求めて・・・

「祈り子」

39頁

> h r s i z e = " 1 " <

「そろそろ着くぞ、カイト。あれがコロット村だ」

うっそうと茂る草木を掻き分け、森林地帯を進む二つの人影があった。

すでに日が暮れかけていた。

だが、道中ほとんど休む事なく歩き続けたおかげか、

二人は何とか夜になる前に、村へ到着することができそうだった。これも父ランディの計算の内だったようだが、まだ9歳になったばかりのカイトにはさぞ過酷だったに違いない。

と、ランディは息子を案じてはみたものの。

当の本人はケロツとしていて疲れなど微塵も感じさせない。

鼻歌交じりにスキップしている姿を見れば一目瞭然である。

「さすがに、俺の息子だな・・・」
と、ランディはカイトを見つめながらそっと呟いた。

「ま、何にせよ無理をさせて悪かったな。この辺りは夜になると凶暴なモンスターが出没する。お前を危険に晒したくなかったんだ」
ポン、とカイトの肩を叩く。
そう。

ココット村周辺は、夜になると危険度が増す。
ただでさえ迷いそうな森林地帯で、「ランポス」という肉食鳥竜が集団で姿を現す。

一度獲物を見つけると、その鋭い牙と爪で容赦なく襲い掛かる。
小型だが、動きが素早いため暗闇ではとても厄介なモンスターだ。
ランディ一人ならば問題ではないが、わずか9歳の息子が一緒となるとやはり危険だと判断したのだろう。

ランディは一通り危険な理由を息子に説明したが、父のその言葉にカイトは納得いかない様子だ。

「でもパパなら平気だよ。それに僕だって一緒に戦うもん」

「おいおい。気持ちは有難いが・・・武器もないのによく言えたもんだ」

「あるよ、ほら」

カイトは得意げに、やたらゴツイ木の棒をブン、と振り回した。

「くつくつく。確かにそれを振り回せるだけでも大した

もんだが、そんなんじゃないやランポスには当たらんぞ、逆に返り討ちだ」

「・・・ちえっ」

カイトはふて腐れると持っていた棒を両手で、えい、と放り投げた。

「無用な戦いはなるべく避ける。鉄則だ、覚えとけよ」

そう言つと、ランディは拳でカイトの胸を軽く叩いた。

しばらく歩くと、ようやく村の入り口が確認できた。
森を抜けたのだ。

何十時間と森林地帯を歩いてきた二人にとっては、まるで洞窟から
抜け出したような

開放感だった。

カイトは晴れやかな笑顔で小走りしながら、「もー森はヤダ！」と
連呼していた。

ランデイも同じ心境だった。

（まずは村長に会おう。会って、全てを話さなければ。）
ランデイの足取りがここへ来て少し重くなったように見えた。

プロローグ（後書き）

下手くそですが、暖かい目で見守ってくれれば嬉しいですよ。

プロローグ〜帰郷〜

いつしか人は言葉を手に入れた。
同時に自由を失くした。

「祈り子」 49頁より抜粋

> h r s i z e = " 1 " <

ココット村は世界四大大陸の一つ、ヴェルチア大陸南西部ココット地方に位置する、森と丘に囲まれた小さな村だ。

村人は少数ながらも、常に活気で溢れている。

他の村や街に比べ、大きな争いや事件、モンスターによる被害も少なく、

平和な部類に入る村、と言ってもいいだろう。

村の中心部の大岩には、かつて「ココットの英雄」と呼ばれた現ココット村の村長ゾルデが使用していた剣が刺さっており、その聖なる力により邪悪なモンスター達から村を護っていると言われている。

とは言うものの。

ココット一帯の各モンスター達の行動範囲、行動パターンから分析して、村の中

にまで進入してくる事はまずないだろうという見方が強い。

だが、過去に起きた悲劇「古龍種事件」など、例外もあるので決して油断はできないのだが、今現在のココット村に関して言えばこの「剣」は、いわば村のシンボルの要素が強い。

ココット村の概要は、こんなところだ・・・

「……って、聞いてるのか？」

ランディはカイトの背中を、ぼすん、と道具袋で叩いた。

「よくわかんないよ、難しい話は」

口を思い切り尖らせたカイトは、同じ小石を蹴り続けていた。

「あんな、難しい話なんかしてないぞ。俺たちが今日からお世話になろうとしているこの村が、

どんな村なのかを、むしろ優しくかいつまんで説明してやってただけだ」

「ぜんぜん優しくないよ、だって僕お腹空いたんだよ？」

「いや……意味わからんから」

ーココット村ー

昔と変わらない。

ココット村の入り口近くまで来たランディは、そう思った。

中途半端に手入れされた草木、今にも崩れそうな大岩や、樹齢1000年と言われる大木。

黄色い光を身に纏い、絵を描くように宙を飛び交う「光虫」もまた、ランディにとってより一層懐かしさを引き立たせるものだった。

（またここに戻ってくる事になるとはな、人生ってやつは本当にわからんぜ）

「そういえば、とうさんは昔、ここに住んでたんだっけ」

村の大木を見上げながらカイトが尋ねると、それまで木で戯れていた

た小鳥達が一斉に飛び立った。

同時に、沈みかけた日に分厚い雲が重なり、辺りは闇に包まれた。

ランデイは問いに答えなかった。

中々返事が返ってこないのがカイトは木からランデイに視線を移動させた。

何か考え事をしていて、まったく耳に入らなかったようだった。

「ねえ、とうさんてば」

カイトは顔を覗き込んだ。

ランデイは虚を付かれたように後ずさりをする格好になった。

だがその行動にむしろカイトのほうが目く驚いた。目を丸くさせている。

「・・・どうしたの？」

「いや、何でもないんだ。で、なんだって？オシッコか、カイト」

「ちよつと前に済ませたじゃんか、もう。それより中に入ろうよ、お腹減ったよ」

カイトは自分の腹を何度も擦って空腹をアピールした。

「そつだな」

そう言つて、にこりと笑顔を作ると、カイトの肩を抱いて村の入り口に歩き出した。

村の入り口には見張りと思わしき人物が、身の丈ほどもある槍を片手に立っていた。

見張りは、近づいてくる二つの影を確認した。

一人は長身でガッチリした体格をしていて、長い茶色の頭髪を後ろで結んでいる。

装備に関しては、ハンター系よりも劣るような、かなりの軽装に見えた。

赤く薄汚れた、年季の入っていそうなマントを羽織っていた。

顔や、時折覗かせる両腕には、無数の傷が刻み込まれている。

見た目の軽装さとは裏腹に、分厚い壁が迫ってくるような感覚に見張りは襲われていた。

こういった感覚は見張りにとって初めてではない。

かなりの‘実力者’だ、と直感的に理解した。

もう一人は子供だった。

背丈などから、10 12歳程度だろうと思われた。

頭には真紅のバンダナをしていて、まだまだ幼い無垢な瞳をしている。

丈夫で動きやすい、長旅に向けたホワイトジャージを身に着けていた。

やはりこちらも、比較的軽装であった。

雰囲気から察するに、親子である事は間違いなさそうであった。

見張りは二人を一旦制止させ、事務的にはあるが、用件と名を尋ねる事にした。

「こんばんは、ココット村へようこそ。失礼ですが、あなた達は？見たところこの村の住人ではないようですが」

傷の男は鼻をポリポリ搔いて見張りをじーっと見つめている。

質問に応じる気がないようだった。

やがて男からは笑みがこぼれはじめた。

見張りは、やや不快になり、文句の一つでも言おうと思ったのだらう。

「あの・・・」と見張りが口を開こうとしたが、男がそれを遮った。「久しぶりだな、ホク口ですぐわかったぞ。随分たくましくなった

じゃないか、マーカス」

マーカスと呼ばれた見張りは狼狽した。

何故この男は自分の名を知っているのか？

だが男の顔をもう一度見上げた瞬間、マーカスの過去の思い出が自分の頭に急速に

流れてくるのを感じた。

流れが徐々に穏やかになるにつれ、記憶はよりハッキリとした形で捉える事ができた。

「まま、まさか・・・」

マーカスは懐かしさと動揺で言葉が出てこなかった。

しびれを切らした傷の男は自分で名乗る事にした。

「ランディ・リグナス、ただいま帰郷」

プロローグ〜帰郷？〜

ランディの突然の帰郷。

その知らせは、またたく間に村中を駆け巡った。

12年ぶりの事だった。

村人は皆ランディの変わりように驚嘆した。

この辺境の村から輩出したハンターが、ハンターの最高峰である

「G級ハンター」として名を馳せている。

その噂は村人の耳にも当然入っていて、皆が「村の誇り」と一様に称えていた。

そんなランディも昔は、いたずら好きで、泣いてばかりいた子供だったようで、その事を

懐かしむ声も村のいたる所で聞こえていた。

中でも一番の話題はと言えば、息子カイトの存在に他ならなかった。幼き日のランディに瓜二つだ、と村人は口を揃えて言った。

まるで昔にタイム・スリップしてしまったようだわ、と顔をくしゃくしゃにして

喜んでいたのは、昔ランディが良くしてもらった「ラノ婆さん」だ。

「ラノ婆さん」は食料品店を営んでいて、昔はいたずら好きのランディに世話を焼かされたらしい。

またこの子もつまみ食いをしに毎日やって来るのだろうか、とラノ婆さんは心配していたが

子供が大好きな事もあり、自然と笑みがこぼれてしまうようだった。しかし懐かしさに浸る反面、村人にはどうしても気になる事があった。

<母親>は誰なのか……？

ランディにとって、今回が村をでてから初めての帰郷。

ならば、母親が顔を見せに来てもいいのではないか、と村人は考えた。確かにココット村は辺境の地、それも山奥にあり、周辺にはモンスタ―も出没するため危険を伴う。

だが今は温暖気。

この時期はココット村への定期船が、様々な街や村から出ているのだ。

にもかかわらず、親子は少なくともココット地方の森林地帯を徒歩で抜けてきたことは明白だった。

二人はスリ傷や汚れが目立ち、しかも真新しかった。

つまり、そのようなリスクを負ってまで船を使わず村を訪れた事や今ここに母親がいない事などは、何か特別な事情があるに違いない。そう村人は考えたが、結局深く詮索する事はしなかった。

「お願いします、師匠」

その言葉に、村長はピクリと反応した。

「懐かしい響きじゃな。しかしもうワシはお前の師匠ではない、そう呼んでくれるな」

「.....」

ランディは目を伏せ、自分を責めた。

やはり勝手な事を申し出ているのだ。

半ば反対を押し切り村を出て行った人間が、突然帰ってきて、

また此処に住ませてくれだなんて。

虫が良すぎる話なのだ、と。

考え込むランディの様子を、ただじーっと見つめていた村長が、不意に指を

パチン、と鳴らした。

奥にいる女性に合図をした。

どうやら村長の妻キリカだった。

その独特な凜としたたたずまいと、厳しさと優しさが共存する力強い瞳は、村長と同様

昔のままだ。

二人とも、ランディの事を本当の息子のように想い、育てていたと村人は話す。

次々に過去の記憶が蘇るランディは、言葉に言い表せない喪失感に支配された。

あの頃は笑顔で満たされていたはずの、この食卓。

だが今は、こうしてお茶を運んできてくれるキリカに笑顔はなく、厳しい顔をしていた。村長も同じだった。

ランディは「お久しぶりです」と言葉は軽かったが、深々とめいっばい頭を

下げた。

キリカは少し微笑んでくれた。

出されたお茶に目を移す。

コロット村の名産品である、独特の甘い香りがするお茶だった。

「レイホン・テイ落葉茶懐かしいですね。……いただきます」

ランデイが何回か、カップを口に運び、やがて飲みほすまで、お茶をすすする音と、時折椅子が軋む音以外は何も聞こえない時間が続いた。

飲み干されたカップが置かれると、それを合図に、ようやく村長が口を開いた。

「お前が考えてる通り、ワシらは裏切られた気持ちじゃった。お前を息子同然に可愛がり、育て、鍛えてやった恩を仇で返されたとな。」

あの日、家出同然で村を出て行ったお前をずいぶん恨んだ時期もあった」

それはランデイにとって胸をえぐられる言葉の連続だった。

それだけの事をしたのだと、後悔の念に襲われた。

何を言われても仕方がない。

「……じゃがの」

そう続けた村長の声は、穏やかだった。

「お前はワシの想像を遥かに越える男となって、戻ってきた。

今のお前を見れば、この12年間の濃密さがうかがえるわい。

それに、余りに充分過ぎる罰を……お前は受けたじゃろうて」

穏やかに話す村長の横には、キリカがそっと立っていた。

それはいつか見た光景、いつか感じた暖かさ……。

溢れ出る感情を抑える事が出来ない。

ランデイは両手で顔を抑え、嗚咽していた。

細かく上下するその肩に、村長の手が置かれた。

「村の出口右手に、空き家がある。」

ワシが物置に使っているが、今となってはガラクタばかりで処分に困っていた

のじゃ。すまんがアレを片付けてくれんかの」

ありがとうございました、というラベンディのお礼は言葉になっていなかった。

「お帰りなさい」とキリカがつぶやいた。

ハント・i それから・・・

その昔、不老不死を手に入れた男は
200年を過ぎた頃に精神を壊し、自らの体をも
壊した

そして現在に至るまで、未だ夢を見続けている

「祈り子」

112Pより抜粋

「父さん！手加減するなってさつきから何度も言ってるだろ！！」

俺は尻餅をついた状態で啖呵を切っている。

こんな状態で出てくるセリフじゃないな、と我ながら情けなく思った。

しかし俺にだってプライドというものがある。

父に敵わないのは当然としても、やはり加減されるのは気分が悪い。

「手加減？なるほど、それが分かるようになったのは、お前がまた
一つ成長した証だな」

父は利き腕じゃないほうで木刀を持ち、俺をあしらっている。

利き腕はポケットの中だ。

誰が見ても手加減だとわかる。

これで分からないなどと言う奴がいたら驚くって。

いくら修行をしてもらっている立場とはいえ、ここまで息子をコケにしてもいいものか。

俺は立ち上がり、怒りに任せて突進していた。

が、父は実に無駄がない動きでそれを受け流し、スキだらけになった俺の胸へキツイ

一撃をお見舞いしてくれた。

「ズド」っと鈍い音が聞こえた。

瞬間、全身の硬直と呼吸困難で声が出せない。

そのまま両膝が落ちた。

両膝が地面に付いた衝撃で、俺はなんとかうめき声をあげる事が出来たが、

今度は吐き気に襲われ、土下座するように地面に倒れ込んだ。

父の足音が近づいてきた。

どうせ今日はここまでにしよう、とか言うんだ。

そつに決まってる。

もう立ち上がれないから反論しようがない。

「カイト、今日はこの辺にしよう。お前、疲労で構えも何もかもがメチャクチャだ。続きは明日！これ以上は怪我を招くだけだ」

「・・・もう傷だらけだつつの」

俺は地面に突っ伏したままの状態でつぶやいた。

「帰るぞ。お前それ、風呂へ直行だな」

父はそう言ったが、俺はすぐに帰る気にはならなかった。

「それとも、また滝に行くのか？」と父が俺に背を向けたままつぶやいた。

「・・・知ってたの？」

「お前の事は何でもお見通しだ」と父が得意げに親指を立てた。

なんだよそれ、気持ち悪いな。

まあ別に知られてどうなるわけでもない事なので俺はいつも通り滝

へ向かうだけだった。

「じゃあ先戻ってて。今日も御指導ありがとうございました！」

「はいよ〜早めに戻ってこいよ。温暖気だからって油断していると風邪ひくからな」

冗談で言ってるのだろうか。

俺は（多分）生まれてこの方、風邪なんてひいた事ないのだけど。

ココット村のはずれにある、「トランスの滝」。

特訓後、最近は頻繁にこの滝へ来ていた。

滝の上からの眺めは素晴らしく、静かでいて力強い滝の音や虫の音が響き渡り、

疲れた体と心を癒してくれる。

ここで寝そべっていると、なんだか自分も自然の一部になった

ような気にさせてくれる、お気に入りの場所。

雲一つない空には、新円を描いた月がポカンと浮いている。

そういえば初めてこの村に来た時も、あんな感じの月だったっけ。
あれから7年が過ぎた。

父は相変わらず多忙なハンター生活を送っている。

何故この村を拠点にしているのか明確な理由は分からないが、
少なくともこのような辺境の村を拠点にする事にメリットはないよ
うに思える。

移動に時間がかかるし、結局何日も帰ってこない事もしばしばだ。

とは言っても、俺はこの村が好きなので何も不満はない。

むしろ父の身のほうが心配でしょうがないのだ。

そんな父は、空いてる晩は必ず俺に修行をつけてくれている。

そこまでして頼みたくはないのだけど、日に日に強くなっていく実
感は堪らないものはある。

多分父は、俺をハンターにするつもりだろう。

期待に応えたい気持ちは勿論あった。

実際ライセンスはまだないが、何回か父と一緒にモンスター討伐を
した事がある。

もちろん非公式であって、依頼されたものではない。

その中で、止む無くドスゲネポスというモンスターを素手で仕留めた時があった。

ドスゲネポスというのは肉食鳥竜の一種で、同種のゲネポスを率いる親玉の名だ。

素早い動きとバネを生かした跳躍を駆使し、鋭い爪で襲い掛かってくる。

体内からは非常に強力な毒を吐く事でも有名だ。

外見の特徴や攻撃パターンはゲネポスとほぼ変わらないが、親玉だけあって体がゲネポスの倍以上

あったと思う。

父には素手はやめると怒鳴られたが、後で船乗りのガトーさんという父の古い知り合いに

その事を話したら、とてもビックリしていた。

「アレを得物なしで討伐した奴なんか見たことねーよ」とあきれた顔をしていた。

他にも、村の皆や、父の友人や後輩の人達が、俺なら父を越えるハンターになれる、と

口を揃えて言ってくれるのだ。

だが、今の俺は本当に心からハンターになりたいと思っているのか。この問題は毎晩この滝に足を運び、いくら考えても答えが出ないはまだ。

昔は何の迷いもなく、父の様なハンターになりたいと公言していたにもかかわらず、だ。

最初に迷いが出たキツカケは、先に挙げたドスゲネポスが卵を必死で守っている

姿を見た時からかもしれない。

更に、父が依頼される内容の中にも、「珍しい鉱石を発見した。掘りに行きたいから　を狩って

くれ」など自分勝手な依頼も多々あり、依頼の全てがモンスターによる被害が原因でない事も

俺の頭をもたげてしまった。

モンスターによる被害といっても、中には依頼人が自らモンスターを刺激し怪我を

負ってしまったからアイツを殺してくれ、だの騒ぐ輩もいるらしいのだ。

父は、それも仕事のうちだと言い、要は気にしないようにしているらしい。

ハンターの真髄は、己との戦い・・・。

父が出した答えはこれだった。

父は言う。

お前は、お前の答えを追い求めればいい。

しかし答えはいくら考えても導き出せず、修行の度にこの滝へ来ては、またそれを考える。

他に仕事は沢山あるし、何も痛い目にあったり生き物を殺したりする職業じゃなくても

いいんじゃないか？

ある意味ではこれは、'雑念' に近いかもしれない。

こんな雑念を抱いたまま修行を続けていたら、いつか大きな怪我を招きそうだ。

モヤモヤした胸のつかえはいつまで続くのだろう。

「・・・そろそろ帰るか」

結局今日も答えは出なかった。

思考をやめた途端、辺りの虫の声や滝の音が一斉に騒ぎ出した。

俺は寝そべっていた体を起こすと、無意識に近くにあった石を拾い上げ、

それを月に向かつて勢いよく投げた。

なんととはなく、内から来る衝動から出た行動だった。

特に意味はなかった。

そのはずだった。

石を投げた方角の深く反り返った崖に、ゆっくりと動く影。

俺は目をこらした。暗闇であっても、視力には自身があった。

「……人だ。」

「女の人？こんな時間に……」

女性と思われる人影は、どうやらゆっくりと崖の先端へ向かっていく様子に見える。

全身の毛が逆立つ。

「やばいつ」

思考より先に体のほうが動いていた。

ハント2 出会い

炎は更に勢いを増した。

少女は薄れゆく意識の中、鉛のように重い目蓋を懸命に開き続けていた。

この世の地獄とも言える光景だった。

赤く巨大な牙がまるで自ら意志を持ち、それはすぐにでも少女を噛み砕いてしまいそうだった。

だが、全身を襲う焼け付くような痛みと、煙による中毒症状が出始めていた少女にとって

その光景に恐ろしさを感じることはなかった。

無意識に、出口に向かって這いつついている自分すらも理解出来てはいなかっただろう。

目の焦点はおぼろになり、口元からはおびただしい涎が流れていた。

不意に少女の頭上でミシミシ、と音が鳴った。

思わず上を見上げ、気がついた時には燃え滾る天井の破片が眼前に迫っていた。

咄嗟に少女はそれらを右手で払いのけた。

右手は酷い火傷と裂傷を負ってしまったが、痛みはなかった。

！……最後の力だった。

(もうだめね・・・死ぬんだ・・・わたし)

死の覚悟とともに、強烈な眠気が少女を襲った。

その瞳が閉じられてから、実際はほんの数秒しか経過していなかっただろう。

少女は夢の中で、確かに音を聞いた。

ゴオゴオと、激しく、まるで憎しみがこもった様な炎の音の中で響いた、優しい音色。

何かが床の上を転がる音がした。

………ガラス……???

どうやらガラスが割られた音だったらしい。

床に散らばったガラスは、しばらくするとジャリ、ジャリと音をたて始めた。

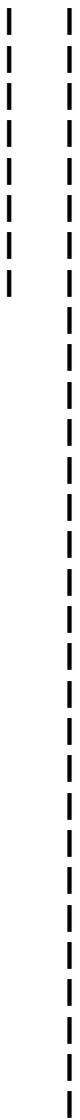
音が目の前で消え、代わりに黒い塊のような気配を眼前に感じた。

少女は瞳を閉じたままであったが、自分に向かって差し伸べられている掌を不思議と

ハッキリ確認できたのだ。

「もう大丈夫だよ」と、声が聞こえた。

掌がぐい、と掴まれ体がふわりと浮いた。



バチン！

崖下で何か弾けるような音が響いた。

大きな岩があちらこちらに転がっており、それに小石か何かかぶつかっただらしい。

その音で、少女は我に返った。

「何で今になってあんな時の事を思い出すのよ・・・」

険しい顔付きで少女は、激しくかぶりを振った。

腰まで伸びた、金色の見事なストレート・ヘアがフワリとなびく。

一瞬でも躊躇した自分を必死で押さえ込み、少女の蒼い瞳は先程までの、悲壮な決意に

満ちた瞳へと変化させた。

と同時に、少女の頼りない足は、ゆっくりと確実に、暗く深い闇の底へ進みだした。

一歩、また一歩と、‘死の世界’が歩み寄ってくるように。

やがて眼下に真っ黒な谷底が現れた。

ゆっくりと両手を横に広げる。

風の音とともに、木々が哀しげにざわめく。

履いていた靴は既に少女の足元に綺麗に置かれていて、靴の中から紙切れの一部がのぞいていた。

瞳が閉じられた。

すべき事は、もう、何も無かった。

後はこの足を一步踏み出せば、終わる。

少女にとっての過去の記憶、病の現在いま、そして・・・

未来の恐怖からも解放される。

（お父様、お母様、ローワン、そして、私を見てくれていた全ての人へ感謝します）

— 　　—
そして、さよなら

その体を、ほんの少し前へ倒す作業を頭の中で描き、遂行した後の、極僅かな一瞬。

落下に向かったはずの自分の体は、謎の衝撃とともに右後方に飛ばされた。

混乱する思考をまとめられない少女は、自分の体をひたすらに両手で確かめる仕草を繰り返す。

ケガ一つ負っていない。

無意識に立ち上がると、何かにつまづいてしまった。

のそりと、それは動いた。

人だ、と少女は理解に到った。

助けられたんだ。

わたしはまた生き永らえたんだ。

少女のおぼろげな瞳の先には、安堵の表情を浮かべるカイトの姿があった。

「間に合って、よかった」

カイトがそう言うと、自分と同じくらいの年齢であるつ目の前の少女は、酷く荒んだ目付きで

カイトを見た。

「……………して……………な……………よ」

少女は何か言葉を発したが、風のせいですれを聞き取ることが出来なかった。

ハント3 真夜中の訪問者

思うより先に行動に走っていたから、特に明確な理由はなかった。

だから、目の前の女の子の「どうして助けたりしたの」という問いには

うまく答えることは難しかった。

そもそも人が飛び込もうとしているのをこの目で見てしまったのだ。

見過ごすなんて出来るわけがない。

何も間違ったことをしたわけではないんだ。

「俺はあのー・・・」

と先程まで休んでいた北の丘を指差した。

「あの場所で、君が飛び込もうとしているのが見えたんだ。

事情とかそういうのを知らないのに先走っちゃったのかもしれない。

君にとっては迷惑だったかもしれないけど、やっぱり放っておけないよ。

人が飛び込むと知ってて黙ってるなんて、俺には出来ない」

本当のことだった。

彼女は聞いているのか聞いていないのか判断が難しかった。

地面にお尻をついたまま、あさつての方向をぼんやり見つめている。

右ひじを気にしているようだ。

よく見ると擦り傷のようなものがある。

あっ、と俺は思った。

「ごめん、さっき俺が助けたとき怪我したんだね」

彼女の反応はなかった。

月明かりに照らされた彼女の腕は白く、ほっそりとしていた。

眩しいほどの金色の髪、そして透き通るような青い瞳。

顔立ちも、欠点という欠点が見当たらない。

改めて見ると美人だな、と俺は思った。

「・・・冗談はよして」

「へっ」

「あんな遠くから、人が見えるわけがないわ」

俺は心を読まれたのかと内心慌てたが、どうやらそうではなかったらしい。

「視力にはちよつと自信があるんだ」

「にしたつて、第一あんな場所からじゃ間に合うわけないもの。

あなたの言い分じゃ私を見つけた時、もう飛び込もうとしてたつて言うじゃない」

「いや、だからそれも」

「目的は何？」

目的、という言葉にピンとこなかった。

彼女は相変わらず視線を合わそうとはしない。

完全に死の世界から戻ってきていない、そういった表現が当てはまる。

彼女はまた、いつ俺を振り払って飛び込むかわからない。

とにかく会話をして、彼女の混乱と精神疲労を少しでも回復させな
いと。

「あのさ、なんか誤解してない？」

俺はわざと笑顔を作ってみた。

すると彼女は、とても鬱陶しそうにこちらを見た。

初めて目が合った気がした。

「あなた私を助けて、どうするつもりだったのか聞いてるの」

「・・・こんな事言ったら無責任かもしれないけど、別に何も考えてなかったよ。

さっきも言ったとおり、無我夢中だったから後先考えなかったんだ。

でも、君が落ち着いたら家まで送りたいところだけどね、

助けた責任もあるしそれは当然のこと・・・」

待てよ、と俺は思った。

彼女は何処に住んでいるのだろう。

彼女の服装はとても華やかだった。

どう見てもこの辺りの住人とは思えない、どこか気品に満ちた雰囲気を感じる。

「君って、何処に住んでるのかな？」

「・・・そう・・・あなた屋敷から私を尾けてきたんじゃないのね」

「屋敷？」

「いいの。じゃああなた、こんな夜中にここで何をしていたの？」
誤解を解けるチャンスだと思った。

彼女の言葉から察するに、おそらく俺が誘拐でも企んでいるか、助けたかわりに

何かしらの無理な要求を企んだりする、つまりは、そういう不届きな輩では

ないかと疑われたわけだ。

俺は自己紹介も兼ねて、事の経緯を、ゆっくりと、丁寧に、彼女に伝えた。

結果、どうやら彼女はマリア・フェーデルという名である事。

そして住まいはここから4レント北にあるトランスの丘の屋敷だという事がわかった。

誤解も無事解けたようだし、何にせよ悪党だと思われずに済みそうだ。

自殺に走った動機は聞かない事にした。

そこまで深入りするにはまだ早すぎるし、何よりその話題を出すのは危険だと思ったからだ。

「ねえ」

不意にマリアがささやくように言った。

「ん、どうかしたの？」

俺が尋ねると、彼女はあろう事か崖の先端へ足を運びだした。

「ちよっ・・・待てよ！何をっ・・・」

勢いで彼女の肩を思いきり掴んでしまった。

彼女は微動だにしない。

ゆっくりと首だけを俺に向けた。

「靴を履くだけよ。手、離してくれる？」

溜息が出た。

驚かさないでくれ、心臓が悪い。

ゆっくりと手を肩からどけた。

「これだけは言っておくわ。」

あなたは私を助けてくれたから、あなたの前で飛び込むような事はしないと約束する。

でも、結局私には生きる意味も希望も、何もないのは変わらないの。あなたがいないここ以外の、別の場所を選んで、今度こそ実行に移すかもしれない」

「・・・・・・・・」

彼女の声は確かに耳に入っていた。

だがその時、俺には「まったく別の何か」・・・例えるならば風が葉を揺らすような音が

耳の奥でザワザワと鳴っているのを感じていた。

今はまったく風は吹いていない。

その「音」も、最初は微々たるものだった。

だがその「音」は徐々に、しかし確実に高く、強く響いてくるようになってきた。

どうしようもなく、耳に残る不快な響き。

不意に、その「音」がぴたりと止んだ。

同時に、今度は強烈な「におい」が漂ってきた。

俺は何度もこの‘におい’を経験している。

背中に張り付くような、独特の殺気とそれが放つにおい。

「・・・ちょっと、どうかしたの？」

彼女は俺の表情の変化に気がついたようだった。

「マリア、俺の後ろに隠れる」

マリアは訳がわからないといった様子だった。

「早く！」

俺の声と同時に、茂みから巨大な暗闇が現れた。

ハント4・毒怪鳥ゲリヨス

信じたくなかった。

今まで一度だって、こんな場所で大型モンスターに出くわした事などなかった。

錯覚だと信じたかった。

ソイツは、一つ雄叫びをあげた。

錯覚じゃないぞ、とアピールするかのようだった。

いや、アピール云々のレベルではない。

一瞬、目の前の空気が切り裂かれたのかと思った。

凄まじいまでの咆哮。

「ゲリヨス毒怪鳥……これって大マジなのか」

ヤツと目が合った。

なんて目つきだ。

見逃してくれる様子は、これっぽっちも感じない。

だが、ここで応戦しようにも多くの問題がある。

第一に、やっかいなのはヤツの攻撃パターンだ。

マリアを残して戦うには、あまりに危険だった。

「マリア、よく聞いて」

「危ない！」

俺が声をかけるのと同時に、マリアが叫んだ。

ヒュン、と巨大な鞭がしなるような音が聞こえた。

俺はマリアを抱えて後方へ避けた。

「シツポか！」

それにしても、あの風圧。

もし顔面にでも食らったら一瞬にしてK・Oされちまう。

「マリア、しっかり俺につかまってるよ」

「どっつする気？」

「逃げるんだよ、こんな木が密集した場所でゲリヨスとやり合つのは危険だ！」

「ちょっと待って、アレをこの森に放っておくつもりなの？」

「ヤツは怒らせると、猛毒を吐き散らしながら突進を繰り返す。

おまけにトサカから発せられる閃光は、こちらの視界を一定時間奪われる。」

だいいち、俺の獲物はこの修行用の木刀だけだ。

勿論ヤツの恐ろしさはそれだけじゃない。君を守りながらだとキツイ戦いになる」

「……」

「っと、責めてる訳じゃないよ、勝手に助けたのは俺のほうだし」

「まあ・・・わたしも丸腰だし文句は言えないわ」

「とにかく逃げよう、掴まって！」

俺はマリアを抱えて、全速力で森を突っ切る作戦にでた。

「余計な戦いはなるべく避ける、鉄則だ」

いつかの父さんの言葉が思い浮かんだ。

<想定外の出来事に遭遇した場合、とつさの判断が生死を分ける。

弱肉強食のこの世で生き残るには、適切な判断力と、それを実行できる能力。ポテンシャル

そして、一番お前に足りないもの……>

ガサツ！と、茂みから音が聞こえた。

「なっ？！」

茂みに目を向けると、ゲリヨスは猛スピードでこちらに突進してきた。

「そんなバカな！追いつかれる訳がないのに……なんでっ……！」

その時、俺はハツとした。

そうだ、あの時。

マリアを助ける時に、‘使って’しまっていたんだ。

今の俺の実力では、あの距離を使えばもうガス欠ってわけか。

俺はゲリヨスの突進を皮一枚でなんとか避け、いったん距離を置くことに成功した。

辺りを見渡すと、いつの間にか開けた場所に出ていた。

ここは・・・そう、見覚えがあった。

俺が初めて父さんとココット村を訪れる途中、最後にキャンプをした場所。

無意識に、唯一森の中で開けた場所である「ここ」を、俺は目指していたって事になる。

村の場所を特定させないように全速力でゲリヨスを捲き、いったんマリアを村へ避難させる。

それが最良の選択だった。

だが俺の意識と「脚」は、まったく別のことを考えていたってわけだ。

……どうせ逃げ切れないなら、ここでヤツを仕留める――

問題は……

俺は後ろにいるマリアに目をやった。

「なに？……どうかしたの？」

マリアは不思議そうに、ポカンとした顔をしている。

こんな非常時に、この子はなんて落ち着いた表情。

自分の生死がかかっているというのに、何故こんなに落ち着き払っていられるのだろう。

考えて、俺は自分の頭を一つ叩いた。

この子は、マリアは、なるほど死ぬ覚悟はとっくに出来ているんだっけ。

……死を恐れていない。

それは彼女を助けた俺にとっては、とても悲しいことだと思った。

自惚れに近いが、俺が助けてあげたことで少しは彼女も変わってくれるだろう、と思っていた。

でも多分マリアは、この場でゲリョスに殺されてもしょうがない、それも運命だ、などと思っている

に違いなかった。

だからこれほど平然としていられるのだろう。

出来ればこの子には生の喜びを思い出して欲しいところだけど、今の状況下では

そんなマリアが逆にありがたいのも事実だった。

取り乱して叫んだり、逃げ回ったりされるよりリスクが少なく済むからだ。

「マリア、ごめん、逃げ切れない。コイツはここで仕留める」

俺はゲリヨスから目を離さないままそう伝えた。

ヤツはじりじりと、こちらの様子を窺いながら近づいてきている。

まだダメージは与えていないから、毒は吐いてこないはずだ。

この距離を保っていれば、そうそう攻撃を食らうものじゃない。

「大丈夫なの？」

「平気、心配しないで。絶対君を死なせたりはしない」

「わたしは貴方の心配をしてるのよ、木刀しか所持していないんでしょ」

・・俺を心配？

立場をわかっているのだろうか。

マリアはことごとく気が強い女性だった。

こんな状況なのに、それでも俺を心配してくれている事が、なんだか少し嬉しかった。

そうか、俺はもしかして・・・

「ちょっと、来るわよ」

マリアが俺の背中をぐい、と引つ張った。

見ると、ゲリヨスは例の如く突進の構えを見せていた。

大きくポツカリと空いた口からは、大量のよだれが溢れ出ていた。

隙あらば、俺らを噛み砕いてやるって顔だった。

「弱肉強食・・・俺はこの言葉が嫌いだ。何の救いもない響きだ。

でもこの世の理は全て、その4文字で片付いてしまう。例えば今の状況もそうさ。

生か死か、どちらかにどちらかが下される。

経過はどうあれ、生き残ったほうが強者、死んだほうが弱者って事になる」

「・・・何を言っているの？」

「俺らは生き残る。そしたら、強者だ。強者は最後まで弱者の分まで生き抜かなくちゃならない」

俺がそう言つと、後ろからため息が聞こえた。

「言い方は気に食わないけど、あなたの言いたい事はわかったわ」

「まずは、コイツを仕留める。それからだね」

俺はマリアを後方に押しやり、木刀に手を添えた。

父さんの言う俺に足りないもの、それは、非情に徹する、ということ。

それが試される、これ以上ないシチュエーションだと思った。

ゲリヨスの首がピクリと動いた。

ハント5・違和感

ジユワ、と心地よい音が響いた。

しかし、思わず食欲をそそられるその音とは裏腹に、辺りはとてつもない悪臭に包まれていた。

フライパンを一つひっくり返す度に、耐え難い臭いが増すかのようである。

「カイトの奴やけに遅いな・・・何かあったのか？」

ランディは調理中のソレを味見しながら首をかしげた。

「うーん、まだ何か足りねえなあ・・・そうだ、カンタロスの殻でも入れてみるか！」

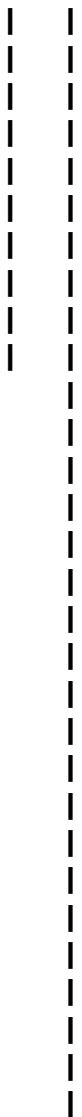
カンタロスというのは、主に密林や洞窟など、湿気のある場所を好む甲虫である。

生で食する事は出来ず、燃烧しても低度の刺激臭が発生し味も苦すぎるため、

一般的に料理で使われる事はまずない。

「ランディ作・その名も、レインボーチャーハン、だ・・・完璧だぜ」

ゴトン、と豪快にフライパンが置かれた。



「カイト!」

俺を呼ぶ、マリアの悲痛な叫び声が聞こえた。

なんだ・・・案外大きな声出るんだな・・・って感心してる場合じゃないや・・・

何が起きたんだっけ・・・？

ちくしょう、わからない。

何で俺は宙を泳いでいるんだ。

・・・・・・宙?!

地面が近づいてきたので、俺は宙に飛ばされた事を認識した。

慌てて受け身をとったが、まだ混乱する思考がまとまらない。

だがヤツを見失っている以上、いやでも次の攻撃に備える必要があった。

俺はゲリヨスの姿を捉えるため、上空と左右、素早く眼だけを動かした。

・・いない。

背後を意識した瞬間にゾクリとする。

咄嗟に俺はその場に素早く伏せた。

同時に、俺の背後にいたゲリヨスは体ごと尻尾を回転させていた。

身の毛もよだつ風切り音が鼓膜の更に奥まで届くかのよう。

間一髪だった。

後ろを確認してからでは間に合わなかったかもしれない。

「今だ」

俺はゲリヨスの足に、渾身の水面蹴りを放った。

ギオオオオ、と不快な叫び声をあげながら、ゲリヨスは地面に倒れこんだ。

見た目は薄いグレーの体色で、全体的にヌメつとした印象を受けるゲリヨスだが、

思っていたより遙かに硬い体をしていた。

蹴りを放った右足に、鈍い痛みが走ったからだ。

「カイト、無事なの?!」

「大丈夫!いいからマリアはその茂みに隠れてて!何かあってもそこから動かない、いい?!」

「わかってるわよ!」

俺は再度距離をとり、ジタバタしているゲリヨスを警戒した。

あんな態勢からでも何かを仕掛けてくるかもしれない。

「くそっ・・・俺はいつたい・・・」

俺は思い出しそうとしていた。

先程、ゲリヨスの首がピクリと動いたとき、俺には解ったはずだった。

ヤツは突進する際、必ずあの仕草を見せる。

2〜3突進を見せた時にもあの仕草を確認していて・・・そう、いわばヤツの「癖」を見抜いていた。

俺はあの瞬間、躊躇なく踏み込んでいたと思っただが、何か強烈な違和感のようなものに

囚われて攻撃の手を止めてしまった。

そのせいで……

そうだ、直撃とはいかないまでもヤツの突進を食らう羽目になったのだ。

下手に戦いを長引かせるわけにはいかない。

毒による攻撃やトサカを使わせる前に、一撃で頭と胴を切り離すくらいでなきゃいけないんだ。

……持つてるのは木刀だけだ。

それなのに。

何故、俺はあそこで躊躇してしまったのだろうか。

やっぱり俺は父さんの言うとおり、モンスターにさえ非情になれないのか。

いや、いや、よく考えろ。

コイツは俺らを殺そうとしているんだぞ！

俺らが誤ってヤツの住処を侵したわけでも、危害を加えたわけでもない。

今はマリアだっているんだ。

意味もなく、二人揃ってあんなヤツの胃袋に放り込まれるなんてゴメンだ！

さっきの違和感は、俺の心の弱さが生んだ‘まやかし’。

・・そうに決まってる！

(殺らなきゃ、二人とも、殺られるんだ)

何故そうしたかは、自分でもわからなかった。

ただ流れのまま俺は瞳を閉じていた。

集中するために周りの雑音、己の雑念を振り払う為の無意識化における行動。

よくよく考えれば、相手が真つ直ぐ俺に向かってくる確信がなければ決してとれない

行動だと思う。

標的をマリアに変えられたら一生後悔する事になるだろう。

だけど俺には確信があった。

茂みに隠れているマリアの事など一切気にしていない・・・ゲリヨスの意識は完全に俺へ

向けられていることを。

何より、目を開けていたらまた先程の違和感に襲われてしまうような気がしたのだ。

そうしたら今度こそ致命傷、二人揃ってゲームオーバー、だ。

既に立ち上がったゲリヨスは、ジリジリと間合いを詰めてくる。

狙いはさつきと同じ・・・喉元。

トサカを破壊して閃光を封じるのも一つの手だが、逆上して毒を乱射されては困る。

俺は木刀に全神経を集中させた。

ヤツがこのまま俺の間合いに入ってくればベスト、予想外の攻撃をしてくればその時は・・・

使っしかない、‘アレ’を。

その時、ゲリヨスのトサカから奇妙な音が鳴り出したのを、俺の耳はハッキリ聞き取っていた。

ハント6・謎の二人組

「本当に、こんな森の中に逃げ込んだのかよ、兄者」

ココット地方の暗く深い森林地帯を、さっそうと駆け抜ける二人組の姿があった。

二人組のうちの一人は、ゴツイ顔つきに不釣り合いな甲高い声色でそう尋ねた。

「そのはずだ、弟よ。アレには特殊なセンサーが体内に埋め込まれているのは知っているだろう。」

そして、我らが今装着しているこのレーダーを確認してみるがいい」

‘兄者’と呼ばれた男が答える。全身黒づくめなうえに口まで覆われた奇妙なマスクをつけていて、

その表情はまったく読み取れない。

二人は森の中を目まぐるしいスピードで走っているが、不思議な事にその足音は

まったくと言っていいほど聞こえない。

お互い一定の距離とスピードを保ったまま無音で移動をする光景は、不気味ささえ感じさせた。

「確かに兄者の言うとおり・・・この辺みただいな」

そう言つて、‘弟’と呼ばれた男は左手首に装着している銀色のリーダーと、周辺の様子を

交互に確認した。

「我らに手渡されたこのリーダーは最新式の物。‘幻闘会’の中でもまだ中層部から上層部までの

、それも一部の構成員にしか渡されていないそうだ」

「つてえ事は、前ん時みたいな無駄なおつかいにはならず済みそつて訳だな、兄者」

‘兄者’は少し間を置いてから「違くないな」、と言つて小さく笑つたあと、足を止めた。

‘弟’もそれに続き、慌てて止まった。

‘兄者’はリーダーに目をやり、ターゲットを示す赤いマークがリーダーの中心に位置している事を

確認した。

「この辺りにいるハズだ・・・この距離なら気配を探ればすぐに見つかる。」

リーダーの音で感づかれて逃げ出される可能性もあるから、ここからは電源を切つて搜索をするぞ」

「あいよ」

二人はほぼ同時にリーダーの電源をおとし、気配を探りだした。

「俺たちももつと修行を積みめば、こんな邪魔なリーダーなんか必要なくなるってのになあ」

‘弟’は鬱陶しそくに頭を掻きながらそう言った。

「・・・まあな。我ら忍しのびは気の流れや強さ、変化を読み取る事が出来る技術に長けた一族。

だが族長のように広範囲にわたって、しかも正確に気の発生場所や強さを特定し得るように

なるなんてのは、並大抵の修行をしたところでその領域に到る事はできん」

「んな事わかってるって。なんてったって族長はハンター時代、大型モンスターの場所をインプットで

きる千里眼系統のアイテムは一切使わなかったんだぜ」

「お前がなんで自慢げに話すんだ？・・・つと」

‘兄长’は不意に右斜め前方・・・茂みの奥に鋭い眼を向けた。

「ムダ話は終わりだ。・・・やっかいな事になっている」

「・・・みたいだな」‘弟’は言われる前からそれを感じ取ってい

た。

「前方に気配、サンプル154号に間違いない。だが・・・」
「兄者」は弟の言葉を待った。

「そばに人がいやがる、それも多分、二人だ」と「弟」が続けた。

「兄者」は、「弟」の口から望んだとおりの言葉が出てこなかった事に落胆の表情を浮かべた。

気配を探る能力、才能、自身の体術、その全てにおいて実戦経験も豊富な「兄者」のほうが

「弟」のそれよりも勝っている。

何よりも「気配の所在」よりも「気の強さ」を感じ取る事のほうが重要であり、任務において勝率が

8割を下回ると感じた場合は即退散、という掟がある忍にとって必要不可欠な能力である。

「弟」には、いわゆる「気の強さ」を感じ取る能力が不足していたのだ。

だが「兄者」にはどうしても信じられなかった。

感じ取れるこの強力な気配が、サンプル154号などではなく、傍にいる人間から発せられている事。

それも、自分を上回る実力者の可能性がある事を。

「兄者」の額には汗がにじみ出ていた。

「・・・?どうした、兄者」

「なんでもない、とりあえず茂みから様子をつかがつぞ」

二人は気配のもとへ足を忍ばせた。

ハント7・カイトの決意 闘気解放（フォースドライブ）

茂みの奥へ歩み寄ると、月の光が確認できた。

一面小さな草花が広がる、幻想的ともいえる場所だった。

二人組は崩れかけた石壁に素早く身を潜め、様子をうかがう。

‘ 兄者 ’ がゆっくりと口を開いた。

「サンプル154号、確定だ。だが問題は・・・」

「側にいるあのガキか？」

「ああ。まさかこんな事態になっているとは正直想像できなかった。

あれはサンプル品の中でも特に欠陥だらけの失敗作という話だ。もしハンターにでも出くわしていた

ら、何かを感じられる可能性がある。だから上は誰にも気づかれないうちに早急に回収を命じた」

「でもよ、見たところ対峙してんのはただのガキだぜ兄者。気づかれる可能性なんてあるのか？」

それにもし感じていたとしても、このまま放っておけばガキは殺されて終わりだろ？」

奥に隠れてる女も同じさ。そのあとで俺たちがサンプルを回収すれ

「ばい話じゃねーか？」

「いや・・・あの少年はな・・・」

「兄者」はサンプル154号と対峙する少年を視界の中心にとらえた。

（まだ顔は幼い、15〜6歳程度か。

現時点では闘気や殺気もほとんど感じられないから、まだ未熟な弟にはわからんのも無理はない。

だが、奥に潜む強大な気は、サンプル154号・・・ゲリヨス試験作どころか、我ら兄弟の力を

凌ぐかもしれん）

「どうしたんだよ兄者、さっきから何か様子が変わだぜ？」

「兄者」の足が少し震えてるように、「弟」には見えたので、思わず心配で尋ねていた。

「・・・ああ、スマン。

お前の作戦には無理があるんだ。あの少年がサンプルを倒した後に、我らはサンプルを

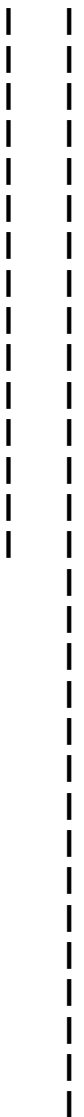
回収する。上には「既に殺されていた」とでも報告すればよい」

「・・・何、言ってんだ兄者」

あっけらかんとした表情を作る、'弟'だが、'兄者'の表情からは一切冗談を言っているような

様子が感じられない。

「お前の未熟さを、その眼に焼き付けておけ、レインズ」



中途半端な攻撃では、ゲリヨスー・・奴の命どころかトサカも破壊できない。

それどころかゲリヨスは逆上し、毒を巻き暴れまわるだろう。

誰かを守るために、犠牲はやはり必要なのか。

ならば俺の信念とは？

いや、俺には信念なんか初めからないのかもしれない。

無駄な殺生はしたくない、なんてのは信念と呼べるものではないのかもしれない。

これは、父さんが言うように俺の「本能」。

俺の中に眠る母さんの血がそうさせているのだ。

だからこそ、マリアという今まさに守らなければならない人がいるというのに、無意識に加減をして、

いたずらに戦いを長引かせてしまっているんだ。

思考を張り巡らせていた最中^{さなか}、突如ゲリヨスのトサカから奇妙な音が聞こえた。

予想外としか言いようがなかった。

（バカな？ たったあれだけのダメージで、もう閃光だった？！）

・・油断。

ただ目をつぶれば防げるといっわけではなく、閃光の衝撃波そのものでも金縛りにあってしまうという

ゲリヨスの閃光。

回避するには、事前に距離をとっておいてヤツが閃光の動作に入っ

た瞬間、光が及ばない位置にまで

避難するか、剣気などによる防御しかテはない。

しかし、反応が遅れてしまった。

防御は間に合わない。

俺はマリアに目で合図を送ろうとして、やめた。

余計な事はせず、あのまま隠れていたほうがずっと安全なのはわかりきっている。

第一、俺は何を伝えようとしたのか。

万が一、光を浴びて金縛りにあっても動じず、どうかその場所から離れないでいてくれ？

いくら彼女でも、こんな無茶なリクエストに答えられるほどタフじゃないだろう・・・。

‘その’一瞬の間、脳裏に、俺とマリアがゲリヨスにむさぼられる光景が浮かんだ。

俺は目玉をつつかれている……。

何度も何度も。

俺に飽きたのか、今度はマリアのほうにかじりつく。

頭部はすでにほとんどが骨と髪の毛しか残っていない。

ゲリヨスは、マリアの頭蓋骨にわずかに残った頬肉をはがしている。

これがこの世界の掟……か

地獄絵図から解放されたとき、何故か周りの景色がスローモーションになっていた。

ヤツは、ゲリヨスは、まだ閃光を放っていない。

一回、二回と頭を突き出している。

三回目の突き出しで、閃光が放たれるはずだ。

思いもよらない感覚、目に見える全てがスロー・モノクロの世界で、決意とともに勝利を確信した。

許してくれ、ゲリヨス。お前の分まで、俺達、は生き抜く。

フォー闘気と呼ばれる、上位ハンターからは必須であるとされる力を解放、

俺は素早く両足に闘気をシフトさせたのち、地面を蹴った。

ハント8・戦慄！一瞬の決着

「あ、あ、兄者・・・ありゃ、まさか・・・」

「弟」・・・レイNZはカイトを指さして情けない表情で声を震わせた。

しかし兄のほうはいたって冷静であった。

カイトの力をあらかじめ予測していた為、想像以上の事は起きていないだけ、といったところだろう。

「フォース闘気・・・お前も知っているだろう。心、技、体、その全てが高い次元で備わっていて

初めて具現化出来るチカラだ。見立てでは、あの若さで既に中級ハンターに名を連ねているも

何ら不思議ではないレベルの使い手だ」

「んな、ちょっと待ってくれよ兄者！俺よりあのガキのが上って事かよ!???」

「お前だけならまだいいがな・・・」

「・・・」

二人はカイトの一挙手一投足を見のがさまいと、目をこらした。

その瞬間、ゲリヨスが閃光攻撃の態勢に入る。

まさにその一瞬であった。

カイトは木刀を両手で構えた。

真剣であれば、いわゆる‘抜刀の構え’のようである。

カイトの周りに落ちていた無数の木の葉が、竜巻状に舞い上がる。

カイトの体が、独特の青白い光のようなものに包まれた、その矢先、カイトの足が

そう、っと地面から離れた。

二人は一瞬、カイトを見失う。

だが、二人も闘気の扱いには慣れている猛者のため、すぐにカイトが何をしたのかが解ったので、

程なくその姿をとらえる事が出来た。

姿をとらえた時、カイトは既にゲリヨスの眼前に迫っていた。

遅れるように、カイトが蹴りだした地面が凄まじい土煙りとともに悲鳴をあげた。

「瞬歩しゅんぽか！・・・はっ、疾え！！」

レインズがそう叫ぶと同時に、天空まで届きそうなほどの乾いた衝撃音が、森に響きわたった。

音が、止んだ。

砂煙が薄くなり、辺りの視界が晴れてくると、カイトの深紅のバンダナが、

ひらひらと宙を舞っていた。

カイトは無造作になった茶色い髪をなびかせながら、右手の木刀をそっと振ると、まるで風に舞う小さ

な砂のように木刀は粉々に散っていった。

そのまま右手でバンダナをキャッチすると同時に、カイトの後ろにいたゲリヨスが崩れ落ちた。

激しい音とは裏腹に、非常にゆっくりと崩れ落ちたように見えた。

その頭部には、ゲリヨスのシンボルであるトサカはなく、代わりに強烈な一撃を見舞われた

新しい黒いマークが額に刻まれていた。

ハンター9・それぞれの思惑

カイトは無言で、手に取った赤いバンダナを締め直すと、自分の両手をまるで汚れたものを

見るかのような目で見つめた。

両手が軽く握りこぶしを作ると、思い出したように、マリアの元へ向かった。

「お待たせ、終わったよ」

マリアの手を引っ張った。

「あ・・・あなた、ひよつとしてハンターなの？」

カイトに腕を引っ張られながら、マリアが尋ねた。

「違うよ。さつきも言っただろ。父さんがハンターやってて、俺は毎晩修行つけてもらっているって。」

俺はまだ16。ハンターは17歳にならないとライセンス取れないんだ」

「そう・・・なの」

マリアは自分の衣服についた砂や草を払いだした。

煌びやかなその白い服は、見るも無残に土だらけだった。

金色の真つすぐだった髪の毛は、湿気と土埃などでベタついてしまっている。

最後に膝元の土を払うと、「ありがとう」と小声だが確かにお礼の言葉が聞こえた。

カイトは照れ臭そうに鼻を掻いた。

「とにかく森を出よう。まず君を送り届けたい。家はトランスの丘の屋敷で間違いなかった？」

「ええ・・・そうだけど・・・別に一人で帰れるわ。来る時も一人だったのよ」

「そもいかないよ。元々比較的安全な森って言われてるけど、それでも100%安全な場所なんて

ないんだから」

「平気よ・・・あたしにとつてだって、ここは庭みたいなものよ」
「いいから」

マリアはカイトを少し睨んだ後、そつとため息をついた。

それを見たカイトは、OKの合図ということだろう、と勝手に解釈した。

二人はまずこのキャンプ場から出るため、出口に向かって歩き出した。

ゲリヨスの死体が横たわっている。

体の向きと頭の向きが、明らかに不自然だった。

カイトはマリアに「見ないほうがいい」と告げ、足早に死体の横を通り過ぎた。

その時だった。

またも違和感がカイトを襲った。

違和感、という安っぽい言葉ではとても言い表せなかった。

足元から頭の天辺までを、ドス黒いものが這いまわるような、おぞましい感覚。

込み上げる吐き気に思わず口を押さえ、足がよろめいた。

「大丈夫？・・・あなたが吐きそうになってどうするのよ」

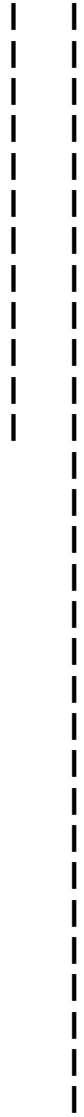
「ごもつとも」と口元を拭い、再び歩き出すが、どうしようもない妙な感覚は拭えなかった。

カイトはマリアを送り届けたあとに、ゲリヨスの始末の件で村の村長と父親に話をするつもりだったので、その時にもう一度調べてみ

よう、と心に決めていた。

「・・・しかし、よくこの装備であれを相手にしたもんだな」
自分の服装を見て思わず呟く。

カイトは、青いTシャツにグリーンジャージという、ほぼ寝巻の
ような恰好であった。



カイト達がキャンプ場を後にして数分後。

ゲリヨスの死体に近づいてくる二つの足音があった。

「ふわー・・・すげーなこりゃ」

青ざめた顔でゲリヨスの顔を覗き込んでそう言ったのは、全身も
青づくめの服装に身を包んだ
レインズだった。

相変わらず、ゴツイ顔つきに不釣り合いな甲高い声である。

「見事なまでの、闘気の集約された一撃だ」と、うって変わって口
調も声色も渋い人物は、

全身黒に身を包んだ、兄者、である。

「今思い出してもゾツとしないな。どう見てもただのガキにしか見

えなかったが。

兄者にはわかってたのか？あのガキの力が」

「・・・ああ・・・まあな」

「兄者」はゲリヨスの額に刻まれた傷跡を見ながらぶっきらぼうに答えた。

「それよりも、早急にサンプルを回収しよう」

「あいよ」

レインズはポケットから透明のビンのようなものを取り出した。ラベルにはこう書いてある。

< g e r y o s 試作品 1 5 4 >

周囲に誰もいない事を確かめ、レインズが勢いよく蓋をあけると、ゲリヨスはまたたく間にビンへ吸い込まれた。すぐに蓋が閉められた。

「終わったぜ」と、レインズは再びポケットにそれを仕舞い込んだ。

「よし。幻闘会へ戻ろう」

「心残りはあるけどな」

「兄者」は横目でレイズを見て、「あの少年の事か」と聞いた。

「だってそうだろ？泣く子も黙る暗殺集団の一員の俺らが、あんなガキに恐れをなしたとあっちゃあ

、シャレになんないぜ」

「今は忘れる。確かに我らは忍だが、同時に幻闘会のメンバーでもある。現在我らが遂行している

任務は、幻闘会の任務で、任務内容はサンプルの回収だ。そのことを忘れるな」

「わかってるって。んな怖い顔すんなよ兄者」

「・・・わかればいい」

程なくして、森の中を、再び黒と青の影が無音で動き出した。
空にポカンと浮かぶ満月だけが、全てを見ていた。

ハント10・フェーデル邸？

カイトはマリアとともに、トラニスの丘にあるというマリアが住む屋敷へ向かった。

森の中は静寂を取り戻していた。

というより、これが普通……。いつも通りの平和な森なのだ。

まるで静止画のような光景だった。

僅かな風さえ、吹いていない。

いつもならとづくに家へ帰っている時間だから、父さんは少し心配しているかもしれない、とカイトは思った。

・・・心配？

カイトは苦笑した。

多少は不審がつていると思うが、それだけに違いなかった。

そう思いたかった。

家に帰った瞬間、心配したぞ息子よ、と叫ばれ抱きつかれる光景が浮かび、カイトはそれを

振りはらった。

むしろ最近が多忙ぶりが目立つランディの身を案じていた。

そこまで考えて、カイトはハツとした。

そうだ、俺なんかよりよっぽど心配されているハズの人間が隣にいるのではないかと。

カイトはマリアの横顔を見た。

整った顔つきで、まつ毛が長い。やはり美人だ、と思った。

自慢の娘だろう・・・両親が心配しないはずがない。

「何よ・・・？」

「あ、いや、別に」

相変わらず反応は冷たい。氷のような眼、といった表現がピッタリだった。

このように生氣のない反応を示したかと思えば、ゲリヨスとの対峙

の際にはカイトの身を案じる

一面を見せたりした。

絡みづらいな、ともカイトは思ったが、あくまでそれは正常であればの話だった。

マリアは身投げを、決行'した人間なのだ。

人が死に至る事由は様々だが、身投げは自らの手で人生を終わらせるということ。

その人の心情や精神状態は、恐らく正常とは言い難いだろう。

本当は心の優しい女の子かもしれないし、元々こういう性格なのかもしれないが、

もし前者なら、きっと深く心を傷付けられるような、辛い事件や事故があつたんだらうな、と

カイトは頭の中で想像していた。

両親が心配しているのではないか、と尋ねようとして、結局口にはしなかった。

よく考えれば、マリアの住まいは屋敷だ。

あくまで予想だが、両親の目を盗んで外出するくらいはワケないのかもしれない、とカイトは思った。

更に時間帯は深夜であるから、成功率はぐっと高くなるだろう。

要するにマリアの外出に気がついていないだけなのだ。

さりげなく、再びカイトはマリアに目をやった。

マリアが歩きながら突然伸びをしたからだった。

その瞬間、カイトはぎょっとした。

マリアの右手に、いくつかの火傷のような跡が見られた。

それもただの火傷ではない、同じ個所に裂傷の跡もある。

前にも未遂があつたのだろうか、とカイトは思ったが、すぐに考え直した。

ケガと火傷は事故によるものに違いない、と。

これもまた、特に根拠はなかった。

草や岩だらけの地面から一転、綺麗に整地された地面へと変化してきた事が、目的地が近い事を知らせてくれた。

森を抜け、半分ほど丘を登ったあたりから、人工的なオブジェや手入れが目に着くようになった。

ここまで1時間程度の時間を要している。

マリアは相変わらず一言も喋らなかつた。

何を考えているのか、その表情からはさっぱりわからない。

これならば、変な話だがゲリヨスに遭遇していた時のほうが、まだ生き生きしていたとさえ

カイトは感じた。

ふと胸につかえるものがあつた。

それは微々たるもので、つかえたものが何であつたかを気にする間もなく、カイトの頭から

その事は消え去つていた。

「・・・もう着くわ。あれがそうよ」

内心、まだ着かないのかなと思つていたカイトの心情を察したかのように、マリアが口を開いた。

感情がこもっていない、まるで人形が喋つたようだと思つた。

カイトはマリアの視線の先に目を向けた。

想像以上でも、それ以下でもない、ごく普通の屋敷が目映つた。

ごく普通という捉え方は、村住まいの俺にとっては滑稽だな、とカイトは心の中で苦笑した。

とはいつても、茶色をベースにした落ち着きのあるデザインは設計者のセンスを感じた。

窓の形なども洒落ている。

俺は何様になつたつもりなんだ、とカイトは思わず頭を掻きむしつた。

屋敷のデザインなんかこの際どうでもいいじゃないか。

「この丘に、こんなオシヤレで立派な屋敷があるなんて、全然知らなかったよ」

一応褒めてみる。もちろん何の反応もない。

当たり前だ、とカイトは思った。

目の前に、背の高い柵と立派な門が現れた。

屋敷の周りには外灯がいくつもあり、その明りに何匹かの虫が集まっている。

屋敷の裏は、深い森が続いているようだ。

少し風が出てきた。

ざわざわ、と森が騒いでいる。

深夜ということもあり、この一帯は非常に不気味な雰囲気さえ感じさせた。

「ここでいいわ。．．どうもありがとう」

マリアが言った。

ここまですれば問題ないだろう。

．．もう会うこともないのだろうか。

カイトは少し複雑な気分になった。

ここで別れて、その後はどうなる。

この先マリアが別の日、別の場所で、今日と同じ事、を決行しようとも、自分は何食わぬ顔で

生活しているのだ。

それはカイトにとって想像したくない光景だった。

彼女を死なせたくないー・・・
何故だか胸の奥から湧き上がる感情を抑える事が出来なかった。

「あ、あのさ」と、絞り出すように言った。

門に手をかけたマリアが、目線だけをカイトに戻した。

「約束・・・してくれ。もう死なないって」

カイトにとって、自分でも意味不明な言葉の投げかけだった。

単にマリアの命を二度、命がけで救ったのだから、もう簡単に死のうとされては困る、という

ような安っぽい感情からくる言葉ではなかった。

ただ死んでほしくない・・・それだけしか言葉が出てこなかった。

「・・・どうして？」とマリアは尋ねた。

「どうしてもだ！」

語気を強めてカイトがそう答えた。

マリアは目をパチパチさせた。

感情表現が著しく乏しいマリアだが、この時ばかりは、あっけにとられた、というような表情へと変化させた。

何か文句の一つも言い返そうと思ったのだろう、マリアの口が大きく開いた瞬間、

ギイイイ・・・と、重苦しい音が鳴り響いた。

ゆっくりと門が開いたのだ。

二人はほぼ同時に門のほうへ視線を向けた。

門から現れたのは、一見正装に身を包んだ若い男に見えた。

だが実際は、髪は白髪混じりで、口元には立派な白いひげが生えている。

若いと錯覚させたのは、ピンと伸びた背筋と、そのたたずまいにあった。

男はゆっくりと二人に向かってきた。

「……ローワン……」
マリアが気落ちしたようにつぶなだれながら、男の名を口にした。

ハント11・フェーデル邸？

「ローワン・・・どうして・・・」

気がついたの、という問いを察知したように、ローワンと呼ばれた男が口を開いた。

「簡単な事です。お嬢様の気配が屋敷から消えたからですよ」
「淡々とした口調だった。」

「だったら、もっと早く気がついてたでしょう？」

「寝ている時までは流石に気がつきません。私が目を覚ました時に異変に気がついたという事です」

ローワンは眉間にシワを寄せ、厳しい表情をマリアに向けていた。

カイトは妙な迫力を感じていた。

見たところマリアの父親ではなさそうだ。

恐らく屋敷に仕えている執事といったところだろうが、彼からは父ランディに似た威圧感をカイトは感じ取った。

独特の、包みこむような威圧感だった。同時にそれは安心感といってもいい。

ここで初めてローワンは、カイトの視線に答えるように言い放った。

「失礼。私はローワンという者でございます。貴方は、どういう経緯でお嬢様と？」

当たり前の質問だったが、すぐに答えられそうで答えにくい質問だった。

一体どこから切り出していけばいいものか、とカイトは腕を組んで唸りだした。

身投げをしようとしていた、なんて下手に言うべきではないだろう。しかしモンスターに襲われたところを救った、という話も、俺から言い出したんでは信憑性に欠ける。

「貴方を変に疑っているわけではありません」

ローワンは静かに、しかしハッキリとした口調で言った。

思わずカイトは顔をあげた。

「お二人は、この屋敷の門の前にいました。仮に貴方が不屈きな輩であるならば、今まさにお嬢様を連れ出す所という流れでしょう。しかしそうではなさそうです。」

お二人は明らかに

森の中をまわった後です。汚れた服と、靴を見れば一目瞭然です。ちよつと衣服が汚れすぎてるのが

気になりますかね・・・それも大方予想がつきます」

「・・・」

カイトは少し考えてから、切り返した。

「逆に怪しいとは考えないのですか？俺が彼女を森で追い回していたかもしれないよ」

「それはありません」

ローワンはピシヤリと言い切った。

「余計な事は言えませんが、とにかくそれはないと断言出来ます。仮にそれが事実だとしても、またこの屋敷の前まで戻ってくるような真似は

、犯人としては絶対にしないでしよう。そんなに長い距離を女性に逃げられるというのも考えにくいです。」

あとは・・・そうですね・・・貴方は右肩をケガしているようですね。それもつい先程のようです」

カイトは咄嗟に右肩を押さえた。

確かにそうだ。

ゲリヨスの突進を受け、打撲を負っていた。

マリアに悟らせないように、ごく自然に振舞っていたはずが、何故ローワンは気がついたのかと、

カイトは啞然とするばかりであった。

「貴方は相当な実力者とお見受けできます。その貴方が、それほどのケガを負ってしまう状況で考えられる

出来事というのは、いくつもあります・・・まあ「

ローワンはひとつ間を置いた。

「何があったか、というのは、何となく察しはついているのです。

ただ、話してもらえますか・・・出来れば包み隠さず「

「・・・私から話すわ、ローワン」

そう言っつて、マリアはカイトに視線を送った。

だまって聞いていてね、という合図だとわかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2423i/>

慈幻闘衣KAITO～モンスターハンター列伝～

2010年10月30日21時41分発行